

京鹿子



京都府立総合資料館
〒600-8585 京都市中京区
西ノ京1-1-1 電話 075-222-1111
FAX 075-222-1112

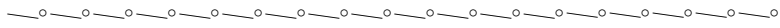
3月号

豊田都峰

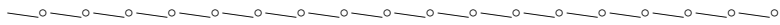
灌響集 その十九

去年今年いくどか破るる音のして
火をひとつ育ててゐたり初日の出
初夢はいまだに二兎を追ふ話
初 茜 勾 玉 出 土 せ し 丘 の
初 雀 御 祖 の 千 木 を 高 み と す
読 初 や 八 千 矛 神 の 国 造





みはるかすもののひとつに雪比叡
雪雲はひと山むかうのひぐれ時
雪の来るけはひに木々の夜のさわぎ
雪もよひほそぼそ木末をかはしめる
雪もやに現れし一樹のひぐれいろ
かやぶきのつららに青きひぐれゐて
風もまた枯ひとついろの湖畔かな
枯野来てうべなふ念怒仏なるを



蝶むすぶ

丸山佳子

唄好きな母に
箆鳴けふも来る
きぎす啼き山彦あそぶ
山を買ふ
上り根をつかみのぼりぬ
雪解坂
雄蝶雌蝶むすぶ
四温の使者として
寒明けし男ばりばり
髭を剃る



秀華採集

木の実拾ふポケットのない服を着て

井尻 妙子

もしポケットの隅に木の実を探し残したら、それは一つの命の問題になる。と言わんばかりの善の認識が、作品の具体的な表現となっている。

てのひらの上が作業場種を採る

荒尾 茂子

舟形の石棺封じ山眠る

西村 滋子

前句の上中の体験的叙述がたいへんよく、命への丁寧な思いがある。後句の「舟形」と具体的に指摘したところがよく、舟は魂を運ぶものと聞く。

鈴鹿 仁

春二番

春二番目線のずれる川の筋

水面鏡血筋しんしんとして流る

風凍ててだんまりしてゐる人も樹も

山がひのこだまとなりて凍返る

春寒し落想の径辿りゆく

近 詠

和田 照海

六郷満山

里人の布施のこころにあはせ柿

仏絵図秘蔵の冥さ櫃の実降る

信心の磴の屹立笹子鳴く

一谷の小里に小寺鶉日和

六郷の満山狐狸みちほとけみち

神麓集



花八分面いろいろの仏舞
石楠花や笛と太鼓の音合はせ
唐からの宮廷舞樂や花まつり
ゆつたりと胡蝶よぎりて仏舞
仏舞浄土に咲くや花櫛

仏舞 林 日圓

秋の精らしき御方と花遊び
不時着のやうに生まれて残る虫
神と居ることに気付かず日向ぼこ
名を呼ばれ振り向きざまに冬が来し
女より女よく知り煮凝れり

松田 都青

スカイツリー 北村 香朗
スカイツリー嬉々と隅田の都鳥
冬晴や水上バスよりツリー仰ぐ
雪吊の縄いきいきと六義園
古河は世界のバラをいと目なく
後楽の雪吊の縄びしびしと

北村 香朗

しなやかに清濁を呑み月に酔ふ
秋気満つ生きて男が持つ病
泣き言を聞く母の居た露の庭
魂魄の稲穂の風となりてゆく
十六夜や娘の手紙胸元に

服部 郁史

掬はれてたばしる水に消ゆ水魚
日の逃げて白鷺冬田の点となる
白鳥の影たわたわと月の湖
山国の日脚は早し鮎雑炊
枯れ兆す菊の向かうに暮るる山

水魚 藤岡 紫水

老松の手入れ最中の浮御堂
秋韻や弥陀千体のひしめく堂
並ぶ句碑色なき風に文字うすれ
読めぬ句碑ためつすがめつ秋惜しむ
天高く湖上の大橋白一線

浮御堂 丹生をだまき

神麓集



山田をがたま
吾が干支の七巡りせる年迎ふ
打撲痛ひきづつてゐる去年今年
初庚申縁起にあやかると今むかし
痛み忘れ新春オーケストラに浸る半日
賀状来ぬ友尋ねる気力なく籠る

鳥 歸る 竹貫 示 虹

鳥 歸るクラーク像の指す方へ
春淺し生まれてすぐに欠伸して
雛の月幸に不幸に泣く人よ
春愁や妻の重ねしままの皿
彼岸の燭すぐに逢ひたき人がゐて

そのひと言 北川 孝子

働きしてのひらもつとも冬ざれて
身に沁むやそのひと言を待つておし
ねむる山流水のごと来る日暮
山眠る遺影とすべき写真選る
柿吊つて待つことひとつ増やしけり

落 葉 柴田 朱美
通夜の帰途落葉の嵩につまづけり
父の背をまだ追ひつづけ落葉踏む
やさしさに触れた旅路の落葉かな
老いの掌をかざすや落葉の嵩を焚き
落葉舞ひ不意に暮色がのしかかる

寒 椿 伊藤 希 眸

ただ一花床を修める寒椿
鐘ごーんと雪被る椿崩れずに
白刃の冷たさ椿三十郎
杞憂すでに池面に映る寒椿
裏垣の椿はひそと家護る

冬の雷 丸井 巴水

胡桃割り脳の凶鑑を捲らうか
冬の雷玄武の神の背後より
思ひ出を散らしつくせり夜の冬木
山里に頼るひとあり雪起し
風呂吹き角の行方や嵯峨野暮れ

年の暮 川崎光一郎
吟行や行きつ戻りつ紅葉溪
冬もみじにも濃淡遅速あり
晩年てふ余白のいのち年つまる
年の暮ひらき直りの八十路かな
八十路坂越したくもなし年の暮

小堀 寛

主なきおもちやは遊ぶ聖夜かな
冬竹の騒ぎあへるに分けいれば
或る男影が先ゆく年の市
煩惱や効くも効ぬも百八ツ
二十四時百一歳へ百八ツ

大兄根岸去帝人 松平菩提子

大根を提げて漢の通り過ぐ
燭台の全てに明かり牡蠣の艶
北風の攫ふものなし細り月
社誌瘦せて想ふ春秋納め句座
はやぶさを観て数へ日の街を行く





京鹿子集

豊田都峰選

降る雨の明るき在所祭かな

京都 井尻 妙子

木の实拾ふポケットのない服を着て

結界を越えてしまつた冬の蝶
冬の雨たそがれてより人恋し

一葉をかざし私の秋じまひ

神信ず心の明しのつぺい汁

アリソナ 伊吹 之博

生国は丹波なりけり冬たんぼぼ

紅葉待つ京への帰路は丸一日

すぐに来る締切さくらもみぢかな

荒尾 荒尾 茂子

友が居て砂漠の町も冬ぬくし
障子張奉仕の若人黙々と

てのひらの上が作業場種を採る

上州の三山かける時雨かな

枝間の脚だけ見えて松手入

医者通ひ時雨をさけてバスにする

渋川 東 秋茄子

削ぎ落とすもの削ぎ落とし寒牡丹

十二月朝ひとすぢの飛行機雲

舟形の石棺封じ山眠る

福知山 西村 滋子

頑張るといふ字うすれてちゃんちゃんこ

冬空に航路どこまでもくつきりと